

【編集後記】

なにわ大阪研究第4号は、論文3篇、研究ノート4篇と研究概要報告3件とかなります。なにわ大阪研究センター改革の最中だったこともあり、研究ノート3篇だけに留まった第3号にくらべると充実した内容となりました。ようやく、センターの運営方向が定まり、基幹研究班と公募研究班とからなる研究体制も整いつつあります。そこで、本号からは、研究班の研究概要報告も掲載することになりました。科研費も毎年の報告が義務付けられています。年ごとに研究の状況を確認しておくことは、大切なことだと認識しています。研究成果の外部への発信という観点からも重要なことでしょう。

本号も、人文、社会、情報などなど、多様性のある構成となりました。みなさんのご協力に感謝申し上げます。なにわ大阪研究センターは、「研究センター」という名称ではありますが、研究推進部ではなく、社会連携部に位置づけられています。研究だけでなく、それを的確に発信し、社会貢献に寄与するという任務を与えられており、その方面での活動が求められているわけです。とくに基幹研究班は、これらをひとつひとつ着実に進めていくことが求められていると考えています。機に応じた柔軟性が求められているわけです。次年度の計画に、豊臣期大坂図屏風のコンテンツ開発を加えたのも、大阪万博を見据え、エッゲンベルク城博物館との提携を強化するためです。センターのこれからの活動として、あたたかく見守っていただければ幸いです。

橋寺先生には、第2号、前号に引き続き表紙・裏表紙絵の選定と表紙絵の解説をいただきました。お礼申し上げます。表紙絵の向うに見える電気科学館、小さいころにプラネタリウムに通った思い出がよみがえります。わたしの記憶の中に電気科学館は、四ツ橋筋の西側にあるのですが、人の記憶というのはあてにならないものです。あの近くの新町の一角に、出版物の取次で大手だった大阪屋書店の味わい深い建物もありました。大阪屋の解散で今はどうなっているのか、長い間あのあたりにはいないので、コロナが落ち着けば、また散策したいものです。

2022年3月

関西大学なにわ大阪研究センター長
乾 善彦